

【論 説】

サラワクの政党政治

統一ブミプトラ保守党の優位政党化メカニズム

大室 元

はじめに

言語、宗教、入境の管理といった特定の分野における広範な裁量を与えられたサラワクはサバと同様に他州以上の高度な自治を行っており、その政治的な自律性から、同州は例えるならマレーシアにおける「国の中の国」(山本, 2009: 7)のような独特の州といえる。観察可能な最大の特徴として半島とは乖離したユニークな社会を指摘できる。先住民族のイバン (Iban) 人はビダユ (Bidayuh) 人と合わせダヤク (Dayak) 人と呼ばれ、出稼ぎの慣習から、焼畑移動耕作、都市への移住など、遠方へと移動する傾向から既存の研究は「移動する人々 (People on the Move)」とも呼称する (Soda, 2007)。サラワクにおいて、ダヤク人は州全体の総人口の約 36% で、同州では最大だが、マレー人は華人と同等の約 24% で、むしろマイノリティである (State Planning Unit, 2021)。民族的観点ではダヤク人もマレー人もブミプトラだが、前者は宗教的観点からはキリスト教徒のため一般に非ムスリムのブミプトラに、後者は人口約 5% のムラナウ (Melanau) 人と同様にムスリム系のブミプトラに、それぞれ分類される民族である。

大まかにサラワクの民族政治を捉えると、英国の支配から独立した最初の数年のうちにはイバン人の短期政権の時代だったが、1960年代の後半に入るとムスリム系のブミプトラの長期独裁政権の時代に移った。

1963年に行われた郡議会 (District Council) 選挙に際しては、ともにイバン人を支持基盤とするサラワク国民党 (Sarawak National Party: SNAP) およびサラワク保守党 (Parti Pesaka anak Sarawak: PESAKA) という2つの党の票が伸びて、州首相には SNAP のニンカン (Stephen Kalong Ningkan) が初就任した (Lockard, 1967)。それによってイバン人が「サラワクの政治を支配する (dominate Sarawak politics)」(Tilman, 1964: 415) 体制が成立した。しかしながら、華人による土地の購入を容易にする土地法案の提出によってムスリム系のブミプトラの民族感情を刺激したほか¹、シンガポールの分離独立、そしてイ

¹ 大まかには混合地 (mixed land zone) だけでなく先住地 (native area land) においても華人による土地の購入を合法として、開墾を奨励し、先住地の売却金を利用したイバン人の定住耕作を促進する案であった。しかしながら、沿岸に暮らすムスリム系のブミプトラは恩恵に乏しく、基本的にその全体の反応は否定的だった (田村, 1988)。

インドネシアの対決政策 (Konfrontasi) という内憂外患から集権化を進める必要性を感じた連邦政府との間にも深刻な軋轢を生じさせるという極めて重大な結果を招くこととなった (田村, 1988; Chin, 2014; Lockard, 1967)。最後には、サラワクは連邦政府の介入に直面し、州首相であったニンカン是非常事態の宣言下における強権発動により強制解任された (田村, 1988)。

そして1970年代以降になり、イバン人による短期的政権が終わるとマレー人およびミラノウ人が力をつけ、新たに非ムスリムのブミプトラを中心とする政治からムスリム系のブミプトラを中心とする政治へと移った。注目される変化として、ブミプトラ党 (Parti Bumiputera : PB) と PESAKA の合併により結成された統一ブミプトラ保守党 (Parti Pesaka Bumiputera Bersatu : PBB) が主導する形でサラワク国民戦線 (Sarawak Barisan Nasional : SBN) 政権が発足した上に、同党が輩出する州首相によって熱帯林における開発が拡大した。連立与党はこれまでに政権交代をしておらず、2018年の総選挙直後、敗北後の国民戦線 (Barisan Nasional : BN) から一斉離脱した SBN の構成政党により再度結成されたサラワク政党連合 (Gabungan Parti Sarawak : GPS) は直近では2021年の州議会選挙で76議席 (定数82) を獲得した。サラワクにおいて、ムスリム系のブミプトラを中心とする政治はなぜ、何によってその長期の安定を保っているのか。

I 先行研究のレビュー

1. 開発政治をめぐる先行研究

全体的にサラワクの体制持続のテーマに焦点を当てた研究は非常に少ない一方で、サラワク政治研究における主要な論点といえる「熱帯雨林政治 (rainforest politics)」研究 (Hurst, 1990)、すなわち森林開発をめぐる資源政治について論じた研究は注目に値する。1960年代以降、輸出産業としての木材の伐採の大規模化によって、民間企業が事業を行うために必要な公式の許可を得るためのプロセスがレント・シーキングの一種といえる「レント・シーキング (rent seizing)」の温床となった (Ross, 2001)。そこでは、政治エリート (= 与党政治家) と経済エリート (= 開発事業者) が「非公式の個別的な関係 (informal, particularistic relations)」 (Dauvergne, 1997: 130) を構築し、前者からは事業許可が、後者からは政治献金が、それぞれ利益として供与される政財界の互恵的なネットワークが成り立つ (シュトラウマン, 2017; 森下, 2013; Dauvergne, 1997; Kaur, 1998; Ross, 2001)。この森林利権のシステムでは、州首相が常に率先して閣僚級のポストを兼任して主導権を握り、開発の実施をめぐる権限を集約しながら自らすすんで利権を追求しようと動いたことが最大の特徴といえる²。サラワクにおいて、ムスリム系のブミプトラは開発を所管する要

² 熱帯雨林開発の中心であったラーマン・ヤコブ (Rahman Yakub) とタイプ・マフムド (Taib Mahmud) は「木材マフィア」の異名をとった (シュトラウマン, 2017)。ラーマン・ヤコブは州首相と林業大臣 (Minister of Forestry) を、タイプ・マフムドは州首相と資源計画

職を独占し権力を集中させ、いわゆる「ビッグ・シックス (Big Six)³」などの企業と癒着し、自分たちを頂点とする利権の構造を築き上げることによって政治の実権を握り続けているのであり、同州における権力の基盤は強固といえる。いわば「汚職による安定」(シュトラウマン, 2017: 115) である。

しかしながら、なぜそもそもムスリム系のプミプトラは長きにわたって要職を独占し続けているのか、ということは以上のような開発政治の展開をめぐる先行研究の知見だけでは説明できない。開発政治において権力を集中するにあたってはまず、政党政治において優位を獲得しなければならないが、既存の研究はそこまでは分析の対象としていない。サラワクの政治に見られるムスリム系のプミプトラの一強支配の実態に迫るには、政党政治における PBB の優位性の要因を分析し、開発政治における実権を握り続けるための前提を解き明かすべきだ。

2. 政党政治をめぐる先行研究

サラワクの主要な政党は民族ごとに結成された地方政党だ。PBB はムスリム系のプミプトラの有権者、サラワク統一人民党 (Sarawak United People's Party : SUPP) は都市部の華人系有権者、進歩民主党 (Progressive Democratic Party : PDP) とサラワク人民党 (Parti Rakyat Sarawak : PRS) は内陸農村部のダヤク系有権者を中核的支持層とする地方民族政党である。サラワクにおいて、第 1 党として長きにわたって最多の議席を占めているのは PBB であり、2021 年に行われた州議会選挙に際しては史上初の単独での過半数を達成した。同州では通常、州議会における第 1 党となった政党の代表が州元首から任命されて州首相へと就任すると、行政機関にあたる州政府評議会 (Majlis Mesyuarat Kerajaan Negeri : MMKN)⁴ がその下に置かれる (河野, 2010)。ムスリム系のプミプトラが今日に至るまでずっとサラワクの開発政治の先頭に立っているのは、第 1 党の地位にある PBB の党員から行政政府の首長である州首相が選出され、閣僚を決めるにあたっての裁量を得られるからである。

とはいっても、PBB の優位性の要因は何かを具体的かつ直接論じた研究は少なく、党としてのその強さは歴代の党首のラーマン・ヤコブとその甥であるタイプ・マフムド個人の采配の強さに帰せられやすい。両氏が中心となって開発のための事業許可の交付権を分配することを通じて党内における幹部全体の凝集性を維持していたと論じる研究が典型といえる (森下, 2013; Ross, 2001; Woon, 2012)。とりわけ、30 年以上という異例ともいえ

大臣 (Minister of Resource Planning) を兼任し、自らの利権の構造を作った (森下, 2013)。

³ KTS 社、Rimbunan Hijau 社、Samling 社、Shin Yang 社、Ta Ann 社、WTK 社の 6 社の総称。木材伐採業者であるものの、熱帯雨林開発だけではなく、不動産業などの事業にも参入する複合企業である。

⁴ 州によって呼び方に違いがあり、サバでは州内閣府 (State Cabinet)、その他の州では州執行理事会 (Executive Council) という名称である (河野, 2010)。

る長期にわたって PBB 党首として君臨し続けたタイプの存在感は非常に大きく⁵、彼のことを現代のサラワク政治における強権的指導者 (strongman) とみなす研究は少なくない (Chin, 2015; Hazis, 2011)。

しかしながら、PBB の強さを党首の権力の強さに矮小化し、両者を同一視することは非常に一面的といえよう。優位政党としての同党の地位は、指導者のリーダーシップという党内要因によって支えられている面もあるものの、政党間のパワーバランスという党外要因によって支えられている面もあるからだ。先行研究において、PBB の優位性の要因はこのような他党との議会内における勢力争いという視点から分析されておらず、同党は相対的に強いことを詳しく論じた研究は決定的に欠けている。華人政党とダヤク系の政党については個別の政党の歴史 (Chin, 1997; Chin, 2004) はもちろん、政策争点あるいは投票行動をめぐる有権者との関係性 (Chin, 1996a; Ting, 2021; Yi et al., 2016)、党内派閥に代表される組織構造 (Chin, 1996b; Chin, 2017) に関連づけた視点から分析され、今日に至るまでの蓄積は多いものの、PBB の優位性の実態に迫った研究は少ない。これらの政党との相対的な力関係にも注目しながら、サラワクの政党政治の歴史を俯瞰し、PBB がその優位性をどう確立させたのかを検討すべきだろう。

3. 本稿の方針

サラワクにおけるムスリム系のプミプトラの一強支配について、本稿では主に「PBB の党勢はどのように他の与野党との勢力争いの末に歴史的に拡大したか」という点に注目して、議会での同党の優位を検討する。

次章ではサラワクの政党政治史における主要な政党の勢力関係の歴史的变化について考察する。最大与党である PBB の優位性の成立要因として、同党の地盤の圧倒的な広さに加えて、他党の党勢の構造的な弱さを論じる。その次の章では、政党間関係の歴史的展開を踏まえ、2021 年の州議会選挙を論じる。沿岸都市の華人政党は互いの票の奪い合いに、ダヤク系の民族政党は新党の台頭に、それぞれ直面している一方、ライバルがない PBB が実質的に独り勝ちしている。Ⅱ章は歴史的な分析視角からみた傾向の把握を、Ⅲ章は今日的な分析視角からみた現状の整理を、それぞれの主要な目的としている。最後にⅣ章においてはプミプトラ系の民族政党同士の差異に注目してみたい。ムスリム系のプミプトラの政党は統合したのに、非ムスリムのプミプトラの政党は分裂したのは、後者にとっては河川の流域を中心として形成された社会の構造を横断するような民族としての共通の利益を形成しにくく、それによって対立がそもそも発生しやすかったことに原因があったと結論づけることができる。終章では以上の内容を総括する。

⁵ PBB の運営におけるタイプの役割について、森下は「これまではタイプ・マフムド元州首相による強いリーダーシップと各派閥に対する巧みな政治的采配によって党内の統一が維持されていた」(森下, 2017: 53) と主張し、個人としての強力な権限を強調している。

II 政党間関係の歴史的展開

1. PBB：合併を通じた地盤の広がり

ニンカンの失脚直後、タイプー族を中心とする知識階級主導のサラワク先住民戦線（Barisan Ra' ayat Jati Sarawak：BARJASA）、そしてアバン（Abang）などの貴族階級主導のサラワク国家党（Parti Negara Sarawak：PANAS）両党が合併してマレー系の合流新党が結成され、PBとして登録された（田村，1988; Leigh, 1970）。しかしながら、1970年の初めての州議会選挙で得られた議席の数は定数である48のうち僅か12で、党勢をいまひとつ拡大できなかった。それどころか、PB、PESAKA、そしてサラワク華人協会（Sarawak Chinese Association：SCA）という3党からなるサラワク連盟党（Sarawak Alliance Party：SAP）の合計獲得議席数は23にすぎず、SNAPとSUPPの議席を合計した24を下回った（田村，1988）。以上のように、議会において、PBは単独でも連立でも優位に立つことはできない微妙な立場を強いられたのである。

当初は政権党として不安定だったPBは、1970年の州議会選挙後にPESAKAを事実上吸収し、PBBとして再編成された。1966年には先述のようにPANASとも合併するなど、ムスリム系のプミプトラの民族政党は短い間に合従連衡を繰り返し、一枚岩的な政党組織を作ることによりスムーズな党勢拡大を図ったといえる。結成の当初からPBBは州議会内の約40%の議席数を一貫して占有し、1990年代以降、議席占有率は図1のように50%

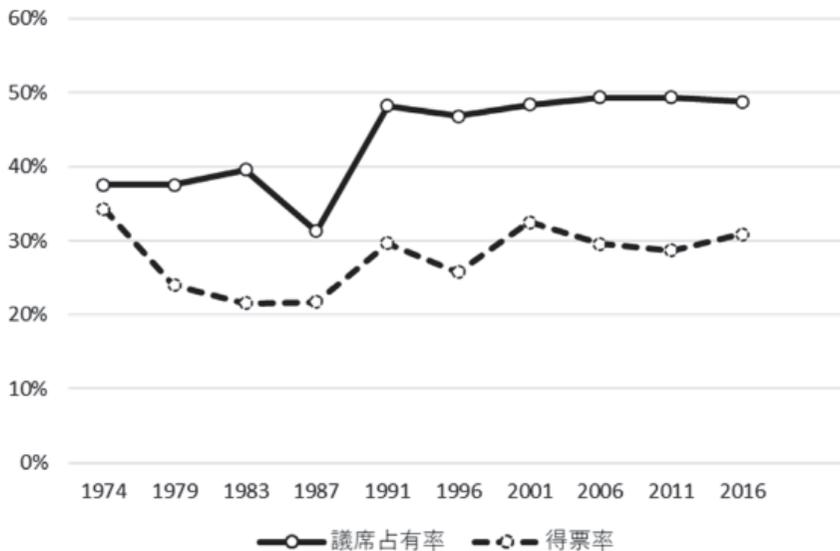


図1 PBBの議席占有率と得票率の歴史的推移（1974年～2016年）

（出典）Hazis, 2011; Suruhanjaya Pilihan Raya Malaysia, 2011; Suruhanjaya Pilihan Raya Malaysia, 2016をもとに筆者作成

前後を維持している。PBに比べると議席の割合は大幅に増えたが、最大の理由はPESAKAの支持基盤だった農村部選挙区のイバン人からの支持を獲得し、広範な地盤を得たことに求められる。中核であるムスリム系のプミプトラだけでなく非ムスリムのプミプトラによっても支持される、党としての民族的な境界線の緩やかさは、候補者を立てられる選挙区の多さという単純な意味でPBBの党としての優位性を支えている。

とはいえ、他党に対しても焦点を当てると、PBBに優位性を与えるのは絶対的な要因だけでなく相対的な要因でもあると考えられる。以下の各項で、華人政党、そしてダヤク系の民族政党による党勢の拡大を妨げる複数の要因を論じる。

2. 華人政党：狭く脆い地盤への依存

半島と同様、サラワクにおける多くの政党は独立の機運の拡大に伴って順次結成されたが、その例に反して、SUPPはマレーシア構想の策定以前の1959年6月に結成された同州で最古の政党だった(田村, 1988; Leigh, 1970)。連立与党における構成政党としては、ムスリム系のプミプトラと非ムスリムのプミプトラの政党間を結ぶ「仲介(power-brokers)」役を担う(Chin, 1997)。PBBとは前身政党であるPB時代からの長期的かつ安定した提携関係が続いているほか、当初から支持基盤が異なることから、選挙においては票を争う関係にはないが、両党には決定的といえる力の差が連立内において存在する。

結成の当初、SUPPは華人に加えイバン人の党員を擁し、「表面上は多民族の(outwardly multi-racial)」(Chin, 1996b: 513)政党として順調に支持を獲得したが、連邦政府の働きかけにより州議会選挙直後の1970年7月に連立与党に加わってからは、「右派で、保守の、華人政党(a right wing, conservative, Chinese-based party)」(Chin, 2012: 109)となった(田村, 1988)⁶。中央の意向を受け入れ、連立与党という枠の中で華人政党として生き残る選択をしたと解釈できるが、代償としてはそのイバン人の支持基盤を喪失したのである。先述のようにPBBはPESAKAの吸収合併に伴って農村部選挙区のイバン人に対してリーチを拡大させたが、連立に参加したSUPPは支持基盤を大幅に縮小させ、沿岸都市に偏在する華人系の有権者の支持政党に転換した。

それでもなお、連立に入ってから議席占有率は25%前後で堅調に保たれており、華人政党としてはSUPPはサラワクで最大勢力となった。しかしながら、1996年に初となる議席を獲得した民主行動党(Democratic Action Party:DAP)に少しずつ地盤を侵食され、地元系と半島系の2つの党派間での勢力争いを生じた。1990年代以降、華人票をめぐる両党の競争は活発化しており、2000年代以降、図2のように議会内の勢力差は縮小している。サラワクにおける華人系の有権者は、地方選挙では地元志向の親華人的な利益配分

⁶ SUPPの連立参加については連邦政府と事前協議されていた(Roff, 1974)。連邦政府としては、PBと組ませることを通じSNAPの党勢縮小を促す明確な狙いがあったが(田村, 1988)、共産主義との関係をめぐって弾圧されていたSUPPには、州内における反逆分子としての扱いを連立参加によって変える意味があった。

への期待から一般に地方政党の SUPP に投票する一方で、国政選挙では連邦政府の反華人的な政策体系への批判から半島系の DAP に投票する「いいところどり (wanting it both ways)」をするとされた (Chin, 1996a)。その傾向は現在では不透明である (Ting, 2021)。

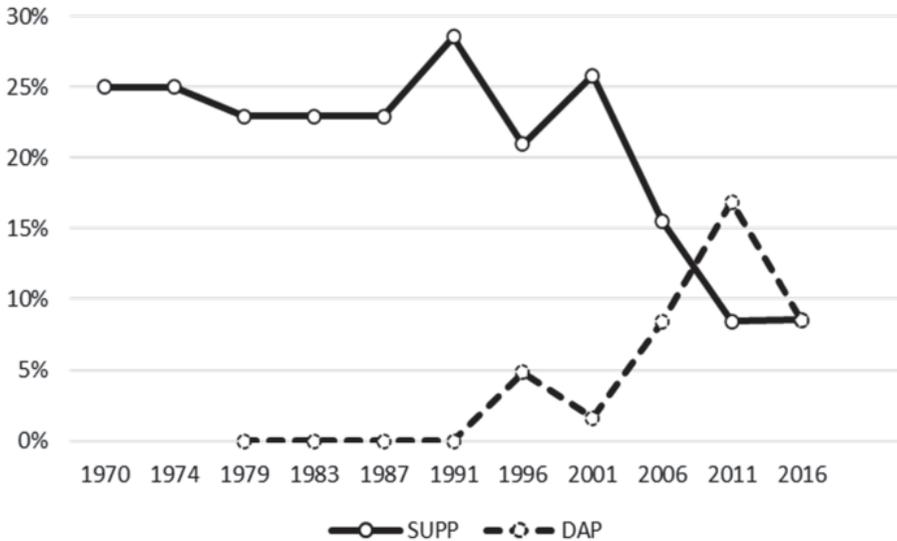


図2 主要な華人系政党の議席占有率の推移 (1970年～2016年)
 (出典) Hazis, 2011; Suruhanjaya Pilihan Raya Malaysia, 2011; Suruhanjaya Pilihan Raya Malaysia, 2016 をもとに筆者作成

連立与党への参加が契機となって地盤が縮小したほか、ライバルとの競争が活発化してその限られた地盤が流動化するなど少しずつ、確実に SUPP の地盤沈下は進行し、議会内における同党の地位は不安定となった。狭小かつ脆弱である華人系の選挙区に依存する政党として、PBB の連立のパートナーとなることで長期的に与党のポジションにいるものの、同党にはもっぱら追従するしかなく、連立内における力の差は固定化している。都市部における華人系の浮動票を得るだけで PBB の優位性を崩すことは現実的ではない。

3. ダヤク系政党：繰り返す分裂と縮小

1970年代以降、イバン系政党の PESAKA は PB へと「売却 (“sell-out”）」(Chin, 1996b: 513) され、イバン人の党员によっても構成されていた SUPP は連立与党に参加してからは華人政党に刷新されるなど、ダヤク系の民族政党は勢いを失った。それによって、一方のムスリム系のプミブトラが「中心」に、他方の非ムスリムのプミブトラが「周辺」に位置する不均衡な力関係が構築され (Ibrahim, 2013)、人口面ではマイノリティであるはずの前者がマジョリティであるはずの后者に政治的には優越する体制が次第に成立した。先

述のように非ムスリムのプミプトラを中心とする政治からムスリム系のプミプトラを中心とする政治へと移行したのだ。

しかしながら、ダヤク系の政党はそれでも再び自ら民族政治を主導しようとし、時としてPBBの優位性を脅かした。1987年に行われた州議会選挙に際しては、古参政党・SNAPからの分裂政党であるサラワク・ダヤク民族党 (Parti Bangsa Dayak Sarawak : PBDS) の議席は合計15議席に到達し、初めてPBBの議席数に並んだ (Chin, 1996b)⁷。しかし2000年代になり、ダヤク系の政党は権力闘争を頻繁に繰り返すにつれて分裂による党勢の縮小を幾度となく繰り返すようになり、連立与党内における「弟分 (“little brothers”）」 (Chin, 2004: 160) 的存在となった。

ダヤク系政党の展開に関しては図3のように2000年代の前後に明らかに変化している。SNAPにおける内部対立によって、「ダヤキズム (Dayakism)⁸」に重きを置いた分裂政党のPBDSが1983年に新たに作られ (Chin, 1996b; Ibrahim, 2013)、20年間の長きに渡って二党分立が敷かれ続けた。しかしながら、2000年代、SNAPもPBDSも両党とも党執行部における権力闘争によって分裂した。前者からは現在のPDPの前身のサラワク進歩民主党 (Sarawak Progressive Democratic Party : SPDP) が、後者からは現政権の連立にも参

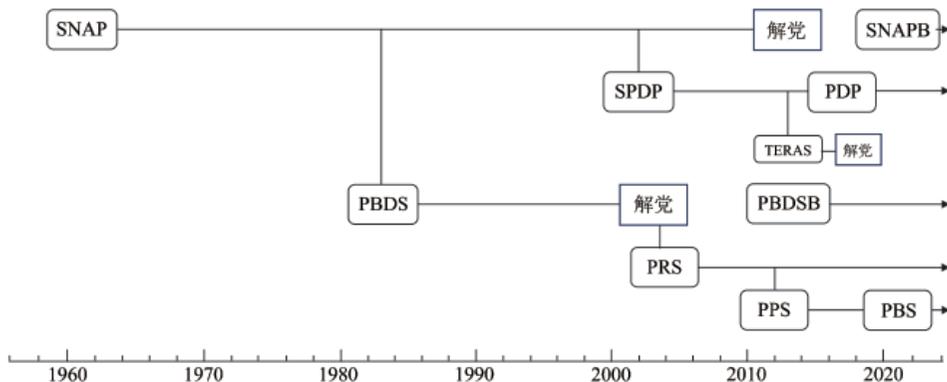


図3 ダヤク系の政党の展開⁹

(出典) Chin, 1996b; Chin, 2004; Hazis, 2018; Welsh, 2006 をもとに筆者作成

⁷ この選挙の直前には、ラーマン・ヤコブが甥であるタイプ・マフムドに対しての不信任案をクアラルンプールのミンコートホテル (Ming Court Hotel) で公式発表し、PBDSの所属議員の多くが同調の姿勢を示した (Leigh, 1991)。この一連の「ミンコート事件 (Ming Court Affair)」といわれる政変を契機とし、PBDSはラーマンの新党と合流し、政党連合の進歩集団 (Kumpulan Maju : KM) を組んで同年の選挙を戦った (Chin, 1996b)。

⁸ 先住慣習地 (native customary land) における土地占有権をはじめ、ダヤク人を取り巻いているイシューを取り上げながら、支持を得るための「政治的なスローガン (a political battle cry)」 (Puyok, 2024: 62) というべき決定的な役割を担っている。

⁹ 本文においては言及していない図中の略語は、サラワク人民の力党 (Parti Tenaga Rakyat Sarawak : TERAS)、サラワク労働者党 (Parti Pekerja Sarawak : PPS)、そしてサラワク民族党 (Parti Bangsa Sarawak : PBS) である。

加する PRS が、対立する党幹部による勢力争いから分派した。分党により結成された PDP と PRS は与党として発展したが、母体の SNAP と PBDS は衰退し、前者は 2013 年に、後者は 2003 年に、解党することを余儀なくされた。とはいえ、2021 年に新 SNAP (SNAP Baru : SNAPB) が、2013 年に新 PBDS (PBDS Baru : PBDSB) が、結成されるなど両党の復興が模索されており、近年になりまた分裂の傾向が拡大しつつある。

Ⅲ 2021 年サラワク州議会選挙

コロナ禍のサラワクで、非常事態宣言が延長となったことから実施されていなかった通算 12 回目の州議会選挙が 2021 年の暮れに行われ、76 議席を獲得した連立与党が定数 82 の約 93% を占有した¹⁰。PBB は擁立した合計 47 名の候補者全員を当選させリードし、議会における過半数の議席数を獲得するなど、優位政党としての地位をより強固にした。SUPP は前回行われた選挙と比較し約 2 倍となる 13 議席を、そして PDP と PRS というダヤク系政党は SUPP の幹部により結成された新興多民族政党の統一サラワク党 (Parti Sarawak Bersatu : PSB) の党勢拡大の影響により苦戦したが合計 16 議席を、それぞれ獲得し GPS の地滑りの勝利となった¹¹。一方の野党は、PSB の 4 議席および DAP の 2 議席のみで、希望連盟 (Pakatan Harapan : PH) の党派としての存在意義は希薄となった¹²。総じて言うと、今までの政党の序列は変わらず、PBB 主導の GPS 体制は安定した政権の基盤を確立した。

ここでは、事例として 2021 年の州議会選挙を参照しつつ、現時点での主要政党の勢力関係を再検討する。

1. PBB : 緩やかでハイブリッドなブミプトラ系の党として

PBB からの当選者を出した選挙区を大きく類型化すると、マレー／ムラノウ選挙区 (28 か所)、イバン選挙区 (8 か所)、ビダユ選挙区 (5 か所)、オラン・ウル選挙区 (2 か所)、そして混合区 (4 か所) だった。候補者を擁立する選挙区の選定では、ムスリム系のブミプトラからも非ムスリムのブミプトラからも支持を集めるという戦略的包括性ともいべき方針を変えておらず、全体としては 47 議席を獲得するという同党にとっては過去最高の結果となった。議会での単独での過半数もまた史上初だった。

¹⁰ GPS として選挙協力したのは PBB、SUPP、PDP、PRS という合計 4 党であった。

¹¹ 完勝したのは 47 名を当選させた PBB と 11 名を当選させた PRS の 2 党であった。野党に押されて 7 議席という結果に終わった 2016 年の州議会選挙のリベンジを固く誓う SUPP は、華人系の選挙区を中心として 18 名の候補者を擁立したが、3 名は PSB に、2 名は DAP に、それぞれ敗北して落選した。PDP は 6 名の候補者を擁立し、当選したのは 5 名であった。

¹² GPS の「サラワク・ファースト (Sarawak First)」というスローガンによる有権者の地元回帰、新党の台頭、提携政党同士の間にあるイデオロギーの隔たりが PH にとって足枷となった (Jugah and Naim, 2024)。

プミプトラの有権者全体を広く支持基盤としている緩い民族政党ではあるが、全47区におけるPBBの候補者の選挙結果によると、同党にとって最も固い地盤はやはりムスリム系のプミプトラを多数派とする選挙区である。マレー／ムラノウ選挙区において、PBBの候補者の平均得票率はおよそ76.7%にもなり、80%に達する得票率となった選挙区はな

表1 2021年サラワク州議会選挙：全82選挙区における選挙結果一覧¹³

区番	区名	マジョリティ	当選	次点
1	Opar	ヒダユ	SUPP	PSB
2	Taski Biru	ビダユ	PDP	PKB
3	Tanjung Datu	マレー／ムラノウ	PBB	PSB
4	Pantai Damiri	マレー／ムラノウ	PBB	PSB
5	Denak Laut	マレー／ムラノウ	PBB	PSB
6	Tupong	マレー／ムラノウ	PBB	PKR
7	Samariang	マレー／ムラノウ	PBB	AMANAH
8	Satok	マレー／ムラノウ	PBB	PKR
9	Padungan	華人	DAP	SUPP
10	Pending	華人	DAP	SUPP
11	Batu Lintang	華人	PSB	SUPP
12	Kota Sentosa	華人	SUPP	DAP
13	Batu Kiang	華人	SUPP	DAP
14	Batu Kawah	華人	SUPP	DAP
15	Asajaya	マレー／ムラノウ	PBB	PSB
16	Muana Tiang	マレー／ムラノウ	PBB	BEBAS
17	Stakan	混合	PBB	PSB
18	Serembu	ビダユ	PBB	PSB
19	Mambong	ヒダユ	PBB	PSB
20	Tant	ヒダユ	PBB	PSB
21	Tchedu	ビダユ	PBB	PSB
22	Kelup	混合	PBB	PSB
23	Bukit Semanja	混合	PBB	PSB
24	Sadong Jaya	マレー／ムラノウ	PBB	PSB
25	Simanjian	マレー／ムラノウ	PBB	PSB
26	Gedong	マレー／ムラノウ	PBB	PSB
27	Sebayau	マレー／ムラノウ	PBB	AMANAH
28	Linggai	マレー／ムラノウ	PBB	PSB
29	Beang Miao	マレー／ムラノウ	PBB	PAS
30	Balai Ringin	イバン	PKR	PSB
31	Bukit Begawan	イバン	PKR	PSB
32	Simanggang	イバン	SUPP	PSB
33	Engkilili	イバン	PSB	SUPP
34	Batang Ai	イバン	PKR	BEBAS
35	Saribas	マレー／ムラノウ	PBB	PKR
36	Layar	イバン	PBB	PSB
37	Bukit Saban	イバン	PBB	PSB
38	Kalaka	マレー／ムラノウ	PBB	PSB
39	Krian	イバン	PDP	PSB
40	Kabong	マレー／ムラノウ	PBB	PSB
41	Kuala Rajang	マレー／ムラノウ	PBB	BEBAS
42	Sempop	マレー／ムラノウ	PBB	PSB
43	Daro	マレー／ムラノウ	PBB	BEBAS
44	Jemoneg	マレー／ムラノウ	SUPP	PKR
45	Repok	華人	SUPP	PKR
46	Merandong	華人	PBB	PSB
47	Pakan	イバン	PBB	BEBAS
48	Meluan	イバン	PDP	PSB
49	Ngemah	イバン	PKR	PSB
50	Machan	華人	PBB	PSB
51	Bukit Assak	華人	SUPP	DAP
52	Dudong	華人	PDP	PSB
53	Bawang Assan	華人	PSB	SUPP
54	Pelawan	華人	SUPP	DAP
55	Nangka	マレー／ムラノウ	PBB	PSB
56	Dalat	マレー／ムラノウ	PBB	PKB
57	Tellian	マレー／ムラノウ	PBB	PSB
58	Balingian	マレー／ムラノウ	PBB	PSB
59	Tamin	イバン	PKR	PSB
60	Kakus	イバン	PKR	PSB
61	Pelagus	イバン	PKR	PSB
62	Karibas	イバン	PBB	PSB
63	Bukit Gomm	イバン	PBB	DAP
64	Baleh	イバン	PKR	PSB
65	Belaga	オラン・ウル	PKR	PSB
66	Munum	オラン・ウル	PKR	PSB
67	Jepak	マレー／ムラノウ	PBB	PSB
68	Tanjong Batu	華人	SUPP	DAP
69	Kemenua	イバン	PBB	PSB
70	Samalaju	イバン	PKR	DAP
71	Bekeu	混合	PBB	PKR
72	Lambir	混合	PBB	PSB
73	Piasau	華人	SUPP	DAP
74	Pujat	華人	SUPP	DAP
75	Senadin	混合	SUPP	DAP
76	Marudi	イバン	PDP	PSB
77	Telang Usan	オラン・ウル	PBB	PSB
78	Mulu	オラン・ウル	PBB	PSB
79	Bukit Kota	マレー／ムラノウ	PBB	PSB
80	Batu Danau	イバン	PBB	PSB
81	Ba' Kelalan	オラン・ウル	PSB	PDP
82	Bukit Sari	マレー／ムラノウ	PBB	PSB

(出典) Suruhanjaya Pilihan Raya Malaysia, 2021; *The Star*, June 12, 2021 をもとに筆者作成

¹³ 本文においては言及していない図中の略語は、人民公正党 (Parti Keadilan Rakyat : PKR)、国民信託党 (Parti Amanah Negara : AMANAH)、汎マレーシア・イスラーム党 (Parti Islam Se-Malaysia : PAS)、そして無所属候補 (calon bebas : BEBAS) である。

んと11区に上った。ここでは、圧倒的な同党の強さをより多角的な視点で論じるため、日本の衆議院議員選挙での重複立候補制度との関連で注目される惜敗率¹⁴の概念によって選挙戦の結果について分析したい。マレー／ムラノウ選挙区において、惜敗率の最大値はベティン・マロ（Beting Maro）選挙区における54.6%にすぎず、ダロ（Daro）選挙区、ダラッ（Dalat）選挙区、そしてサマリアン（Samariang）選挙区などは1桁台という特に低い惜敗率だった。28区全体における惜敗率の平均値は20.3%であった。いいかえれば、PBBの候補者は平均すると5倍の得票差を付けて次点の候補者を退けて選出された、ということだ。当選者の得票率を通じて見ても、次点者の惜敗率を通じて見ても、ムスリム系のプミプトラの有権者からなる選挙区はやはりPBBにとって潤沢かつ安定した得票源といえる。

第1党としてのPBBにとって、非ムスリムのプミプトラを多数派とする選挙区はもう1つの核だが、大票田であるムスリム系のプミプトラを多数派とする選挙区ほどの安定性はない。4か所の混合区と合わせて考えても、PBBの候補者の平均得票率はおよそ63.2%にすぎず、一部では次点者の得票数と拮抗した。19区全体における惜敗率の平均値は34.2%だったが、70%台後半となったパカン（Pakan）選挙区¹⁵およびバトゥ・ダナオ（Batu Danau）選挙区などのイバン選挙区をはじめ、一部の区ではそれほど票差は広がらなかった。

以上のことから示唆されるのは、PBBの党としての包括性の高さであり、一次的な支持基盤としてのムスリム系のプミプトラの全体的な支持を集めることで地盤を「固めている」だけでなく二次的な支持基盤としての非ムスリムのプミプトラの部分的な支持を集めることで地盤を「広げている」といってよい。純粋なムスリム系の政党でもなければ純粋な非ムスリムの政党でもないその境界の緩やかさに同党の強さはある。要するにハイブリッドなプミプトラ系の党なのだ。

2. 華人政党：一進一退の華人票争い

今回の選挙で、SUPPは華人系の選挙区で10議席を、イバン選挙区、ビダユ選挙区、混合区では僅かだが1議席ずつ得るなど獲得した議席の合計は前回の選挙を上回った。2000年代以降になって同党を脅かす「てごわいライバル（a formidable rival）」（Ting, 2021: 75）としての地位を築いたDAPは前回に比べてその議席数を大幅に減らしたが、最大の要因は核であった都市の地盤を失ったこと、すなわち華人系有権者のスイング投票であった。表2では過去3回の華人系の選挙区の結果を一覧にし、各区における当選者

¹⁴ 小選挙区における当選者（すなわち最多得票者）の得票数に対しての落選者（とりわけ次点候補者）の得票数の比である。いいかえれば、当選者に比べると落選者はどれほどの勢力差なのかという拮抗度の値である。日本においては小選挙区における惜敗率を調べることを比例区における「復活」可否を決めるための指標としている。

¹⁵ 2000年代序盤、副党首としてSNAPの内部対立の立役者となり、SPDPの結成にも関与したベテランの議員であるウィリアム・マワン・イコム（William Mawan Ikom）議員の地元である。

と次点者の政党名と得票率を列挙しながら、近年における党派的な勢力関係の全体的なトレンドを図示している。時系列的に見てみると DAP の弱体化は加速度的に進んでおり、2011 年の時点では席卷していた同党の議席は 2016 年は一転して急減したほか、今回行われた選挙では再び減少して僅か 2 議席だった。総じて言うと、2000 年代までは地元系と半島系の競合関係が著しかったが、2010 年代からは半島系から地元系へのスイングが起きつつある。状況を言い表すならば SUPP による捲土重来という様相を呈し始めている。

表 2 華人系選挙区における党派勢力分布 (2011 年～2021 年)

区番	区名	2011				2016				2021			
		当選者	得票率	次点者	得票率	当選者	得票率	次点者	得票率	当選者	得票率	次点者	得票率
9	Padungan	DAP	72.2%	SUPP	24.6%	DAP	64.3%	SUPP	34.9%	DAP	50.4%	SUPP	37.5%
10	Pending	DAP	67.5%	SUPP	31.8%	DAP	62.6%	SUPP	37.4%	DAP	40.3%	SUPP	36.1%
11	Batu Lintang	PKR	71.6%	SUPP	26.3%	PKR	61.6%	SUPP	36.5%	PSB	35.9%	SUPP	35.1%
12	Kota Sentosa	DAP	61.2%	SUPP	37.7%	DAP	58.2%	SUPP	41.8%	SUPP	43.0%	DAP	30.6%
13	Batu Kitang	N/A	N/A	N/A	N/A	SUPP	53.5%	DAP	38.3%	SUPP	57.7%	DAP	19.6%
14	Batu Kawah	DAP	50.9%	SUPP	47.2%	SUPP	54.1%	DAP	36.5%	SUPP	70.2%	DAP	21.8%
45	Repok	DAP	59.0%	SUPP	39.0%	SUPP	52.0%	DAP	45.4%	SUPP	73.2%	PKR	19.9%
46	Meradong	DAP	61.4%	SUPP	37.5%	SUPP	56.2%	DAP	43.8%	SUPP	58.2%	PSB	29.6%
51	Bukit Assek	DAP	73.0%	SUPP	25.4%	DAP	61.0%	SUPP	36.9%	SUPP	34.9%	DAP	28.4%
52	Dudong	DAP	49.6%	SUPP	47.9%	BN-direct	46.4%	DAP	36.1%	PDP	47.0%	PSB	17.9%
53	Bawang Assan	SUPP	56.6%	DAP	42.6%	BN-direct	61.6%	DAP	33.4%	PSB	43.2%	SUPP	36.6%
54	Pelawan	DAP	65.4%	SUPP	34.0%	DAP	58.3%	BN-direct	39.0%	SUPP	27.7%	DAP	27.1%
68	Tanjong Batu	N/A	N/A	N/A	N/A	DAP	59.1%	SUPP	40.2%	SUPP	35.4%	DAP	35.2%
73	Piasau	DAP	53.4%	SUPP	42.1%	SUPP	57.8%	DAP	42.2%	SUPP	66.6%	DAP	17.7%
74	Pujut	DAP	62.9%	SUPP	36.4%	DAP	52.6%	BN-direct	42.2%	SUPP	44.9%	DAP	32.2%

(出典) Suruhanjaya Pilihan Raya Malaysia, 2011; Suruhanjaya Pilihan Raya Malaysia, 2016; Suruhanjaya Pilihan Raya Malaysia, 2021 をもとに筆者作成

しかしながら、「地元」と「半島」の党派間による争いを生じた選挙区もあり、「既成」と「新興」の党派間による争いを生じた選挙区もあり、華人系の選挙区の流動性に関してはやはり基本的に変っていない。まず、プラワン (Pelawan) 選挙区では得票差 100 票、2015 年の選挙区割りによる区名の変更で新規名称となったタンジョン・バトゥ (Tanjong Batu) 選挙区¹⁶においては得票差 23 票となるなど、SUPP にとって、勝ったとはいえ DAP が健闘したため接戦となった選挙区が少なくなかった。また、与野党が入り乱れていたバトゥ・リントン (Batu Lintang) 選挙区もバワン・アッサン (Bawang Assan) 選挙区も PSB が勝ち取ったほか、サイチョウの土地党 (Parti Bumi Kenyalang : PBK)、そしてサラワク人民願望党 (Parti Aspirasi Rakyat Sarawak : ASPIRASI) などの新党が参入し、かつてなく情勢が変化しつつある¹⁷。

¹⁶ 変更前はキドゥロン (Kidurong) 選挙区。この改定では、新たに 11 か所の小選挙区が作られ、現在の定数の合計 82 か所まで増加した (*Borneo Post Online*, December 23, 2015)。

¹⁷ PSB も PBK も華人政党ではない。しかしながら、両党ともそれほど選挙区別の民族構成を問題としておらず、PSB は 70 名を、PBK は 73 名を、それぞれ候補者として立候補させた。サラワクにおける野党にとっては通常、定数の半分を争うことすら相当の困難を伴うことから、初参加の両党からの大量の出馬は異例中の異例だった (Chin, 2022)。

制度的特徴により死票が多くなる傾向が見られる小選挙区制のため、結果を重視するならば SUPP による党勢拡大として現状を整理できるが、得票率はせいぜい 50%ほどであり、同党はそれほど強固な地盤を確立していない。半島の党派も衰退しておらず、新興の党派も台頭しつつあり、華人系の選挙区の流動性はむしろ先鋭化している。その意味では、SUPP は今日においても華人系の浮動票を獲得することに大部分の議席数を依存するという不確実性を克服しておらず、同党は場合によってはすぐにまた党勢を縮小させてしまいかねない。このような SUPP の不安定性については、PBB との提携後、華人政党へと舵を切ったことからイバン人から票を得られなくなり、地盤を失ったことに原因を求められよう。華人からの支持獲得に頼りきっているからこそ、野党による党勢拡大に脅かされやすいのであり、こうした狭く脆い地盤は同党にとって最大の弱点といえる。

3. ダヤク系政党：連立内での従属と連立外での競争

今回は PDP と PRS の両党はイバン選挙区を中心として前回と同等の合計 16 議席を獲得したが、連立内の PBB、そして SUPP の党勢拡大により、相対的に弱体化し、「弟分」としての位置づけは以前よりも鮮明となった。注目すべきは両党の地盤の狭小さである。サラワクにおいて、ダヤク人は先述のように人口規模は最大であるが、利益はもっぱら単一の政党ではなく複数の政党によって代表されており、連立内においては民族的な緩さをその政治的な強さとする PBB はもちろん、SUPP によっても利益代表されている¹⁸。PDP にせよ、PRS にせよ、連立を形成するにあたり他の党と地盤を共有しているのだ。合計 29 か所あるダヤク選挙区では、PDP と PRS はダヤク系の政党でありながら 13 議席を獲得したにすぎず、半分以上の 15 議席を獲得したのは提携政党の PBB および SUPP の 2 党であった¹⁹。統一候補擁立における PDP と PRS の下位政党同然といえる従属的な立場はやはり分裂と縮小の必然的な結果といえる。

そして今回の選挙からは PSB が加わったことで内陸農村地域のダヤク選挙区の競争性が高まりつつある。同党は 2014 年の 8 月になって SUPP から分離独立した統一人民党 (United People's Party: UPP) の後継にあたる政党で、党としての歴史は長くはない一方で、ウォン・スンコ (Wong Soon Koh) 党首を始めとする重鎮を擁するなど、「独立型の地方政党 (standalone regional parties)」(Puyok and Naim, 2023: 236) として台頭中の新興政党である。今回の選挙で、既成政党の PDP と PRS は新興政党の PSB の参入を受けて農村部の地盤を崩され、クリアン (Krian) 選挙区、メルアン (Meluan) 選挙区、ゲマ (Ngemah) 選挙区においては得票差 1000 票以下となった。歴史的には華人政党からの分裂政党であ

¹⁸ SUPP にとって、スリアマン (Sri Aman) 県南部のシマンガン (Simanggang) 選挙区は内陸農村における唯一の牙城で、今回の選挙によってフランシス・ハーデン・ホルス (Francis Harden Hollis) 議員は通算で 6 選となった。

¹⁹ 残る 1 つ、エンキリリ (Engkilili) 選挙区においては、PSB から立候補したジョニカル・ラヨン・ギバ (Johnical Rayong Ngipa) が当選し、内陸農村のダヤク系の選挙区としては唯一の野党の獲得分となった。

る PSB だが、党の方針としてはダヤク人を中心とする民族からの支持獲得を広く重視しており、29 か所のダヤク系の選挙区においては得票率の平均値は 28% となるなど、農村における同党の党勢は拡大している。度重なる分裂と縮小に見舞われ、中小政党同然となったダヤク系政党にとって、内陸農村における票を争うライバルといえる。

今回の選挙はダヤク系政党を取り巻いている構造的脆弱性を浮き彫りにした。今までの疎遠な関係は変わらず、党派は分散し、党勢は縮小し、党として一枚岩的な組織基盤は欠けている。SNAP という同一の政党の派生政党ながら、長きに渡って PDP も PRS も互いに譲らず、連立内では周縁化され、連立外においては PSB との勢力争いで弱体化しつつある。PDP にせよ、PRS にせよ、再び政治の実権を握り、PBB の優位性を脅かすとは少なくとも今のところ考えにくい。

IV 考察

以上を踏まえるとブミプトラ系の党のせめぎ合いとしてサラワク政治の一面を捉えられる。ムスリム系のブミプトラの党に関しては統合と拡大を繰り返しつつ、その組織基盤を一極集中させ、PBB という 1 つの党へと一元化した。非ムスリムのブミプトラの党に関しては分裂と縮小を繰り返しつつ、その組織基盤を多極分散させ、バラバラとなった。こうした違いはなぜ生じたのか、すなわち前者は最初から結束しようとしたのに、どうして後者は最後まで結束できなかったのか。

民族全体としての人口の規模、下位類型とされる集団の種類、そして居住地の広域性などの非ムスリムのブミプトラの人口動態の多様さの影響について政党政治の視点から分析できよう。まず、利益を集約する核としての 1 つの大きな組織を形成する難しさから、政党を作ろうとしても対立を生じがちだった。第 2 地区のイバン人と第 3 地区のイバン人が譲歩することができず結果としてサリバス (Saribas) 川流域の出身者をその構成員とするニンカンの SNAP とラジャン (Rajang) 川流域の出身者をその構成員とするトゥン・ジュガ (Tun Jugah) の PESAKA が結成されたことがその象徴である (田村, 1988; Leigh, 1970)²⁰。また、最初の段階から一枚岩の政党を作りにくかったことから、複数の政党への政治家の分散を生じやすかったといえる。マレーシアが成立した当初から全主要政党がダヤク人のメンバーを擁していた点から非ムスリムのブミプトラの所属政党のばらつきを少なからず窺える (Chin, 1996b)。

政党を結成するにしても、党員を獲得するにしても、とりわけ非ムスリムのブミプトラにとって不利なのは居住地の広域性の影響である。彼ら／彼女らは川沿いに住み、水系を単位として形成された社会、つまり「流域社会」をなす (祖田, 2014)。船に乗ることによって流域から流域へと行き来できるとしても、「流域社会」ごとに言語も文化も千差万別な

²⁰ ブルック王国時代、第 2 地区のイバン人は徴兵されていたが、第 3 地区のイバン人は徴兵されておらず、兵士として優遇される恩恵を得たかどうかで対立を生じたとされる (田村, 1988)。

らば、ただ1つの民族ナショナリズムを「想像」することも（アンダーソン, 2007）、そしてその受け皿となりうるナショナリスト政党を結成することも、難しいと思われる。「ダヤキズム」なるものが党是としては機能しにくい1つの大きな理由がここに見出されよう。地域的な垣根を越えられないため中核的な政党を作れないのである（Jawan, 1994）。

以上のような要因によって、分裂による縮小という、非ムスリムのプミプトラの政党のこれまでの脆弱性について部分的ながらも説明できるだろう。まとめられないことによって、他の民族に主導権を握られてしまい、党の運営に悪影響を生じるのである。SNAPにとって、PBDS結成の要因にもなった1980年代の分裂においても、SPDP結成の要因にもなった2000年代の分裂においても、契機はともに華人系の党幹部の動向であった。PBDS結成をめぐるのは、きっかけは華人系のジェームズ・ウォン（James Wong）の党総裁就任であったし（Chin, 1996b）、SPDP結成をめぐるのは、富豪のティオン・キンシン（Tiong King Sing）議員の党内での処遇問題から内部対立へと発展した（Chin, 2004）。PRSもまた富豪のソン・チーフア（Sng Chee Hua）議員の離反によって分裂しかけた（Chin, 2017）。他民族の党員に火種を蒔かれ、自民族の党員に亀裂を生じる、というパターンである。

おわりに

以上のことを踏まえて得られる結論としては、議会内におけるPBBの優位性は複合的なもので、ムスリム系のプミプトラだけでなく非ムスリムのプミプトラによっても支持されるという同党自身の支持基盤の広範さはもちろん、同党を脅かすに足る数の議席を得られず、追従するしかない他の党の脆弱さによっても支えられる形で成り立っている。華人政党のSUPPは連立与党への参加に伴う地盤の狭小化（1970年代序盤）およびライバルとの競争に伴う地盤の脆弱化（1990年代以降）により、ダヤク系の民族政党は二党分立（1980年代中盤）および多党乱立（2000年代以降）により、それぞれ党勢縮小するという歴史過程をたどった。PBBの優位性は絶対的要因だけでなく相対的要因によっても確立されている強固かつ安定した地位なのである。

注目すべきはプミプトラ系の民族政党同士の角逐であろう。ムスリム系のプミプトラの政党は統合によって強大化し、非ムスリムのプミプトラの政党は分裂によって弱体化し、対照的ともいえる展開史をたどった。河川の流域に根ざす社会の構造に阻まれ、後者にとっては民族ナショナリズムを「想像」することもナショナリスト政党を結成することも困難だったため、党の結束は幾度となく他の民族に翻弄された。

議会におけるPBBの優位性は強固といえる。非ムスリムのプミプトラの一定の支持を獲得している一部の新党は注目されるが、ムスリム系のプミプトラの強固な牙城を崩せるような有力な野党は現れておらず、ハイブリッドなプミプトラ系の政党としてのPBBの集票力は安定している。ムスリム系のプミプトラの覇権はしばらく頑健といえよう。

〈参考文献〉

日本語文献

- アンダーソン、ベネディクト (白石隆、白石さや訳) (2007) 『定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山。
- 河野元子 (2010) 「マレーシアにおける地方行政と地方政府」永井史男、船津鶴代編『東南アジアにおける自治体ガバナンスの比較研究』アジア経済研究所、86-109。
- シュトラウマン、ルーカス (鶴田由紀訳) (2017) 『熱帯雨林コネクション——マレーシア木材マフィアを追って』緑風出版。
- 祖田亮次 (2014) 「ボルネオ内陸社会の流域『間』ネットワーク」『マレーシア研究』第3号、101。
- 田村慶子 (1988) 「マレーシア連邦における国家統一——サバ、サラワクを中心として」『アジア研究』第35巻第1号、1-44。
- 森下明子 (2013) 「サラワクの森林開発をめぐる利権構造」市川昌広、祖田亮次、内藤大輔編『ボルネオの<里>の環境学——変貌する熱帯林と先住民の知』昭和堂、187-220。
- (2017) 「サラワク州政治エリートの中長期的変化とマレーシア政治への影響」『マレーシア研究』第6号、43-55。
- 山本博之 (2009) 「2008年選挙後のマレーシア政治の行方——ブミプトラ政策、イスラム国家、州の機能」『季刊マレーシアレポート』第2巻第1号、5-20。

英語文献

- Borneo Post Online*, “EC chief: New seats now can be contested,” December 23, 2015, <https://www.theborneopost.com/2015/12/23/ec-chief-new-seats-now-can-be-contested/> (2024年4月11日最終アクセス)。
- Chin, James (1996a) “The 1991 Sarawak election: continuity of ethnic politics,” *South East Asia Research*, 4 (1), 23-40.
- (1996b) “PBDS and Ethnicity in Sarawak Politics,” *Journal of Contemporary Asia*, 26 (4), 512-526.
- (2004) “Sabah and Sarawak: The More Things Change the More They Remain the Same,” *Southeast Asian Affairs 2004*, 156-168.
- (2012) “Forced to the Periphery: Recent Chinese Politics in East Malaysia,” in Lee, Hock Guan and Suryadinata, Leo eds., *Malaysian Chinese: Recent Developments and Prospects*, ISEAS-Yusof Ishak Institute.
- (2014) “Exporting the BN/UMNO model: Politics in Sabah and Sarawak,” in Weiss, Meredith L eds., *Routledge Handbook of Contemporary Malaysia*, Routledge.
- (2015) “The ‘Pek Moh’ Factor and the Sarawak Parliamentary Seats,” in Saravanamuttu,

- Johan., Lee, Hock Guan., and Osman, Mohamed Nawab Mohamed eds., *Coalitions in Collision: Malaysia's 13th General Elections*, Institute of Southeast Asian Studies.
- (2017) “‘Malay Muslim First’ : The Politics of Bumiputeraism in East Malaysia,” in Lemièrre, Sophie eds., *Illusions of Democracy: Malaysian Politics and People*, Amsterdam University Press.
- (2022) “Malaysia in 2021: Another Regime Change and the Search for Malay Political Stability,” *Southeast Asian Affairs 2022*, 195-210.
- Chin, Ung-Ho (1997) *Chinese Politics in Sarawak: A Study of the Sarawak United People's Party*, Oxford University Press.
- Dauvergne, Peter (1997) *Shadows in the Forest: Japan and the Politics of Timber in Southeast Asia*, The MIT Press.
- Hazis, Faisal S (2011) *Domination and Contestation: Muslim Bumiputera Politics in Sarawak*, ISEAS-Yusof Ishak Institute.
- (2018) “Domination, Contestation, and Accommodation: 54 Years of Sabah and Sarawak in Malaysia,” *Southeast Asian Studies*, 7 (3), 341-361.
- Hurst, Philip (1990) *Rainforest Politics: Ecological Destruction in South-East Asia*, Zed Books.
- Ibrahim, Zawawi (2013) “The New Economic Policy and the Identity Question of the Indigenous Peoples of Sabah and Sarawak,” in Gomez, Edmund Terence and Saravanamuttu, Johan eds., *The New Economic Policy in Malaysia: Affirmative Action, Ethnic Inequalities and Social Justice*, NUS Press.
- Jawan, Jayum A (1994) *Iban Politics and Economic Development: Their Patterns and Change*, Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia.
- Jugah, Ivy and Naim, Hafizan Mohamad (2024) “Pakatan Harapan's Performance in the 2021 Sarawak State Election,” *Kajian Malaysia*, 42 (1), 35-48.
- Kaur, Amarjit (1998) “A History of Forestry in Sarawak,” *Modern Asian Studies*, 32 (1), 117-147.
- Leigh, Michael (1970) “Party Formation in Sarawak,” *Indonesia*, 9, 189-224.
- (1991) “Money Politics and Dayak Nationalism in the 1987 Sarawak State Election,” in Said, Muhammad Ikmal and Saravanamuttu, Johan eds., *Images of Malaysia*, Persatuan Sains Sosial Malaysia.
- Lockard, Craig A (1967) “Parties, Personalities and Crisis Politics in Sarawak,” *Journal of Southeast Asian History*, 8 (1), 111-121.
- Puyok, Arnold (2024) “The 2021 Sarawak State Election and Dayak Politics: Dayakism, Development and Division,” *Kajian Malaysia*, 42 (1), 49-73.
- Puyok, Arnold and Naim, Hafizan Mohamad (2023) “Resurgence of Regional Coalitions in Sarawak and Sabah since the Federal Elections of 2018 and 2022,” *The Round Table*, 112 (3), 230-248.

- Roff, Margaret Clark (1974) *The Politics of Belonging: Political Change in Sabah and Sarawak*, Oxford University Press.
- Ross, Michael L (2001) *Timber Booms and Institutional Breakdown in Southeast Asia*, Cambridge University Press.
- Soda, Ryoji (2007) *People on the Move: Rural-Urban Interactions in Sarawak*, Kyoto University Press.
- State Planning Unit (2021) *Sarawak Facts and Figures 2021*, State Planning Unit.
- The Star*, “INTERACTIVE: Candidates and key facts of the Sarawak Election,” December 6, 2021, <https://www.thestar.com.my/news/nation/2021/12/06/interactive-candidates-and-key-facts-of-the-sarawak-election> (2024年4月11日最終アクセス).
- Tilman, Robert O (1964) “The Sarawak Political Scene,” *Pacific Affairs*, 37 (4), 412-425.
- Ting, Helen (2021) “Chinese Politics in the 2016 Sarawak State Elections: Case Studies of Dudong and Bawang Assan Seats,” *Kajian Malaysia*, 39 (2), 71-94.
- Welsh, Bridget (2006) “Malaysia’s Sarawak State Elections 2006: Understanding a Break in the BN Armor,” Report prepared for National Democratic Institute.
- Woon, Wilson (2012) “Single Party Dominance in Sarawak and the Prospects for Change,” *Contemporary Southeast Asia*, 34 (2), 274-295.
- Yi, Chai Shin., Yusuf, Nur Afisha., and Wei, Yong Sze (2016) “Sarawak State Election 2016: A Survey on Chinese Voter Behaviour in Padungan (N9),” *Journal of Administrative Science*, 13 (2), 1-8.

マレー語文献

- Suruhanjaya Pilihan Raya Malaysia (2011) *Laporan pilihan raya umum dewan undangan negeri Sarawak yang kesembilan 2011*, Suruhanjaya Pilihan Raya Malaysia.
- (2016) *Semakan Keputusan Pilihan Raya PRU DUN Sarawak Ke-11 (2016)*, Suruhanjaya Pilihan Raya Malaysia. <https://mysprsemak.spr.gov.my/semakan/keputusan/pru-dun> (2024年4月11日最終アクセス).
- (2021) *Semakan Keputusan Pilihan Raya PRU DUN Sarawak Ke-12 (2021)*, Suruhanjaya Pilihan Raya Malaysia. <https://mysprsemak.spr.gov.my/semakan/keputusan/pru-dun> (2024年4月11日最終アクセス).

(おおむろ・はじめ 東京大学大学院)
2024年3月30日掲載決定